津田左右吉年譜・主要著作目録

事歴・著作・主要論文の順に掲げ、刊行出版社・掲載誌等は割愛した。複数年にまたがる論文は、初出年のみとした。詳しくは、『津田左右吉全集』補巻二所収の「津田左右吉年譜」「著作目録」「単行本著作目録」を参照。(作成、今井修)

明治6 年(1873) 10月3日、岐阜県加茂郡栃井村(美濃加茂市下米田町東栃井)に生まれる。本名親文。津田家は尾張徳川藩の附家老竹腰氏に享保年間から仕え、父藤馬は天保14年(1843)の生まれ。家禄42俵。明治2年(1869)帰農。母勢以は安政3年(1856)の生まれ、今尾藩士加藤伝兵衛の娘。

明治12年(1879) 1月、文明小学校入学。校長森達より大きな感化をうけ、19年6月、卒業。

明治21年(1888) 名古屋の大谷派普通学校に入学するも翌年退校し、東京専門学校政治科校外生となる。

明治23年(1890) 4月、東京専門学校邦語政治科2年に編入学し、翌年卒業、在学中に青年文学会結成され、会員となる。

明治25年(1893) [論]「「文学一斑」を読む」「没理想論の根拠」「史論の流行」

明治26年(1893) 沢柳政太郎に伴われ京都に赴き、ついで富山県東本願寺別院附属高岡教校に赴任。

明治28年(1895) 沢柳によって白鳥庫吉を紹介され、西洋歴史教科書編纂。

明治29年(1896) 8月、群馬県尋常中学校に赴任。

明治30年(1897) 5月、千葉県尋常中学校に赴任。6月、白鳥庫吉『西洋歴史』刊。

明治31年(1898) 8月、栃木県尋常中学校に赴任。

明治32年(1899) 4月、千葉県尋常中学校に再度赴任。11月、白鳥庫吉『新撰西洋史』刊。12月父藤馬死去。

明治33年(1900) 4月、兼子みさ子と結婚。9月、独逸協会中学校に赴任。

明治34年(1901) [著]『新撰東洋史』[論]「武士道の淵源に就いて」「国史上の婦人」

明治35年(1902) [著]『国史教科書』[論]「明治維新の原動力」「読史雑攷」

明治36年(1903) [論]「渉史余話」「渉史雑話」

明治38年(1905) 9月、早稲田大学に清国留学生部予科新設され、翌年にかけて日本語講師。[論]「音楽俗話」

明治39年(1906) 3月、旧秋田藩士高橋昌長の次女、高橋常子と再婚。[論]「女学校教育に関する俗説を排す」

明治41年(1908) 1月、白鳥庫吉を主任とする満鮮歴史地理調査部設置、4月、その研究員となる。

明治44年(1911) [論]「雑劇と能と」

大正2 年(1913) [著]『神代史の新しい研究』『朝鮮歴史地理』第1巻・第2巻

大正3 年(1914) 4月、東宮御学問所歴史編纂所嘱託。[論]「文献に現はれてゐる上代の神」「神楽考」

大正4 年(1915) [論]「平家物語と源平盛衰記との関係について」

大正5 年(1916) [著]『文学に現はれたる我が国民思想の研究(貴族文学の時代)』

大正6 年(1917) [著]『文学に現はれたる我が国民思想の研究(武士文学の時代)』

大正7 年(1918) 4月、早稲田大学講師。[著]『文学に現はれたる我が国民思想の研究(平民文学の時代　上)』[論]「遼の制度の二重体系」

大正8 年(1919) [著]『古事記及び日本書記の新研究』

大正9 年(1920) 4月、早稲田大学文学部教授嘱任。[論]「上代支那人の宗教思想」(学位論文となる)「天皇考」。

大正10年(1921) [著]『文学に現はれたる我が国民思想の研究(平民文学の時代　中)』[論]「百済に関する日本書記の記載」

大正11年(1922) 8月、文学博士となる。[論]「三国史記高句麗紀の批判」「上代支那に於ける天及び上帝の観念」

大正12年(1923) 東洋史会を結成。

大正13年(1924) [著]『神代史の研究』『古事記及日本書紀の研究』[論]「神遷■思想に関する二三の考察」「愚管抄の著作年代についての疑」「易に関する一二の考察」

大正14年(1925) [論]「儒教成立史の一側面」「太一について」

大正15年(1926) 6月、東洋文庫研究部研究員就任。[論]「時令と支那思想」「漢代政治思想の一面」

昭和2 年(1927) [著]『道家の思想と其の開展』

昭和3 年(1928) [論]「古語拾遺の研究　附上代の部についての考」

昭和4 年(1929) [論]「上代の部についての補考」「歴史の矛盾性」「子代名代の部について」「支那思潮」

昭和5 年(1930) [著]『日本上代史研究』[論]「前漢の儒教と陰陽説」「大化の改新の研究」

昭和6 年(1931) [論]「儒教と礼楽説」「日本上代史の研究に関する二三の傾向について」

昭和7 年(1932) [論]「神とミコト」「儒教の実践道徳」

昭和8 年(1933) [著]『上代日本の社会及び思想』[論]「書記の書きかた及び訓みかたについて」「「老子」の研究法について」

昭和9 年(1934) 早稲田大学東洋思想研究室設立。[論]「日本精神について」「王道政治思想」「日本思想形成の過程」「上代史の研究法について」

昭和10年(1935) [著]『左伝の思想史的研究』[論]「上代支那思想の論理的側面」

昭和11年(1936) 4月、『東洋史会紀要』第一冊刊。

昭和12年(1937) 3月、『東洋思想研究』第一刊。[論]「「周官」の研究」「念仏と称名」「日本の神道に於ける支那思想の要素」

昭和13年(1938) [著]『蕃山・益軒』『儒教の実践道徳』『支那思想と日本』[論]「マツリといふ語と祭政の文字」「朱晦庵の理気説」

昭和14年(1939) 5月、国民学術協会会員となる。10月、東京帝国大学法学部に新設の東洋政治思想史講座に講師として出講。[著]『道家の思想と其の展開』[論]「日本における支那学の使命」「愚管抄及び神皇正統記に於ける支那の史学思想」

昭和15年(1940) 1月、早稲田大学教授辞任。2月、『古事記及日本書紀の研究』『神代史の研究』『日本上代史研究』『上代日本の社会及び思想』発禁処分。3月、出版法違反で起訴。[論]「支那芸術の一側面」「漢儒の述作のしかた」

昭和16年(1941) 11月、公判開始。

昭和17年(1942) 3月、白鳥庫吉死去。5月、第一審有罪判決、控訴。[論]「神滅不滅の論争」

昭和19年(1944) 11月、時効により免訴となる。[論]「白鳥博士小伝」

昭和20年(1945) 6月、平泉に疎開。

昭和21年(1946) 6月、早稲田大学総長に選出されるも固辞。11月、早稲田大学名誉教授。[著]『論語と孔子の思想』　[論]「日本歴史の研究

に於ける科学的態度」「建国の事情と万世一系の思想」「二ホン人の生活の反省」

昭和22年（1947） 9月、帝国学士院会員となる。［著］『歴史の矛盾性』『日本上代史の研究』［論］「唐詩における花と酒と」「明治維新史の取扱ひについて」

昭和23年（1948） 2月、母勢以死去。7月、『心』創刊、同人となる。［著］『学問の本質と現代の思想』『日本古典の研究』上『二ホン人の思想的態度』

昭和24年（1949） 11月、文化勲章受章。［著］『日本の神道』『おもひだすまゝ』［論］「歴史に於ける必然と偶然」

昭和25年（1950） 4月、武蔵野市境にうつる。［著］『日本古典の研究』下『儒教の研究』第一『必然・偶然・自由』［論］「唐詩にあらはれてゐる仏教と道教」

昭和26年（1951） 7月、文化功労者。［著］『文学に現はれたる国民思想の研究』第1巻『儒教の研究』第二［論］「学究生活五十年」「史学は科学か」

昭和27年（1952）［著］『日本の皇室』［論］「歴史の学に於ける「人」の回復」

昭和28年（1953）［著］『文学に現はれたる国民思想の研究』第２巻『日本文藝の研究』『歴史の扱い方』『文学に現はれたる国民思想の研究』第3巻［論］「現在の歴史教育に関する疑義」「再び歴史教育について」「歴史教育の主要問題」

昭和29年（1954）［論］「シナの禅宗についての疑問の二三」

昭和30年（1955）［著］『文学に現はれたる国民思想の研究』第4巻

昭和31年（1956）［著］『儒教の研究』第三［論］「明治の新政府における旧幕臣の去就」

昭和32年（1957）［著］『シナ仏教の研究』［論］「幕末における政府とそれに対する反動勢力」「トクバカ将軍の「政権奉還」」

昭和33年（1958）［著］『左伝の思想史的研究』［論］「君臣関係を基礎とする道義観念」「維新政府の宣伝政策」

昭和34年（1959）［著］『歴史学と歴史教育』［論］「幕末時代の政治道徳」「わたくしの記紀の研究の主旨」「明治憲法の成立まで」

昭和35年（1960） 3月、美濃加茂市名誉市民に推挙される。10月、米寿祝賀式開催。［論］「維新前後における道徳生活の問題」

昭和36年（1961） 1月、朝日賞を受賞。12月4日死去。［著］『思想・文芸・日本語』

―〈没　後〉―

昭和38年（1963） 10月、『津田左右吉全集』全33巻刊行開始（昭和41年6月完結）

昭和40年（1965） 4月、『文学に現はれたる国民思想の研究』第5巻

昭和50年（1975） 12月、『歴史と必然・偶然・自由』（新学選書）

昭和52年（1977） 9月、『文学に現はれたる我が国民思想の研究』全8冊（岩波文庫、昭和53年4月完結）

昭和55年（1980） 4月24日、津田常子死去。

昭和61年（1986） 9月、『津田左右吉全集』（第2次）全35巻刊行開始（平成元年10月完結）

平成 18 年（2006） 8 月、『津田左右吉歴史論集』（岩波文庫）